

---

# おれたちのせかいへ

志生諸智

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おれたちのせかいへ

### 【Nコード】

N3520BA

### 【作者名】

志生諸智

### 【あらすじ】

数々の冒険を重ねてきたコーティ、ホービー、グレゴリ、ネッドの4人。そんな日々がいつまでも続くと思っていた。そんなある日、コーティは誰も戻った者がいないというクエスト「鬼神との邂逅」へ挑む事を告げる。

## 荒野にて

「どうしても行くのか？」

グレゴリがその隆々とした腕を曲げて顎鬚をさすりながら訊くと、彼女は強く頷いた。

「ずっと前から考えていたの。ずっと皆と旅をしていたかったけど、これは私の目標なのよ。皇神<sup>オジン</sup>に会えばこの世の真理が、これまでの理不尽な事の仕組が解る筈なの」

「だがなコーティ。皇神に会って戻って来た奴は居ないって話はお前だつて知ってるだろう。あのギルド関係者だとかいう男もそう言うていたじゃないか。他の同業連中だつて同じ事を言ってる」

夕闇を剥ぎ取る焚火をコーティの頬が照り返す。切り立った岩だらけの川原には野鳥の声さえ届かず、薪の爆ぜる音だけが響いていた。火の周りに突き立てた串肉から滴りる脂は四人の食欲を刺激したが、誰もそれに手を付ける事をしなかった。

「僕は世界の真理になんて興味無いけど……、止めるべきだだと思うよ。そんな危険な事の為にギルドポイントを使うなんて間違ってる。これまで苦勞して魔獣を狩ってきたのは、更にその先の冒険へ向けての事じゃないか。少なくとも僕はそう思ってたよ。コーティは違うの？ 戻って来れないクエストなんて他に聞いた事ないよ」

四人の中で一等小柄な盗賊のネッドは大袈裟にジェスチャーし拗ねて見せた。今回の件——「皇神<sup>オジン</sup>との邂逅」への挑戦——を最も反対し、最も残念がつているのが彼だ。

「まあ、ポイントを何に使うかは各々の自由だ。俺達がどうこう言う事じゃないし、言った所で聞くコーティじゃないだろう。仕方の無い事さ。……それより俺等とはともかくお前はどうするつもりなんだホービー」

コーティと最も付き合いの長い彼、ホービーは今回の件が問題になってから殆ど喋っていなかった。元々口が達者ではないホービーだったが、落胆ぶりはネット以上と言えた。ホービーは焦げていく肉を俯きがちに睨付けたまま、十分に間を含ませてからゆっくりと口を開いた。

「ずっと昔、僕は兄のお下がりの靴を履いていたんだ。だけどその靴あまりに大きくて歩き辛い上に靴擦れも酷かった。けど母親は『あなたもすぐに大きくなるんだから我慢しなさい』と言い、それが当たり前的事だと思っていたから、その合わない靴を履き続けていたんだ。」

けど、その少し後。とても見た目の格好いい靴を見つけて、僕はお小遣いを貯めてその靴を買った。別にそれまでの靴が嫌だったとか——さっきも言ったけど合わない靴を履くのはそのくらいの子供にとっては当たり前の事だと思っていたからね——履けないくらいボロボロになったとかいう訳じゃない。けど、新しい靴を履いてみて驚いた。とても歩きやすくて足にピッタリとフィットしたんだ。それでようやく兄の足は人並み外れて特別大きかったんだという事に気付いて、僕はそれまでの靴を勿体無いけれど捨て、新しく買ったその靴だけを履くようになったんだ」

再び川原には薪の爆ぜる音だけが響き、三人は身じろぎもせず、かつては串肉だった炭の塊を眺めていた。ネットだけが不安そうに彼等を見回してどうして今そんな話をするのかと訊いたが誰も答え

な  
か  
っ  
た。

## シルクハットの男

四人は世界中の様々な敵を倒しながらギルドのクエストをクリアし、そうしてギルドから得られる金とポイント——ギルドポイント——でスキルや装備を強化して、更なる敵とクエストを踏破した。この世界で名の知れたチームを上から数える事が可能ならば十指には入っただろう。

ギルドポイントと交換できるものはスキルや装備だけでは無い。その一つが特殊クエストへの参加権だ。この特殊クエストの中でも最高ランクの一つである「皇神との邂逅<sup>オージン</sup>」。コーティがこれへの参加権を欲しがった為に今回の争論は起きた。

このクエストに参加するには膨大なギルドポイントの他に、特定の通常クエストをクリアしていなければなかったが、四人の中でその条件をクリアしているのはコーティ以外では彼女と最も付き合いの長いホービーだけだった。そのクエストに進むとなれば必然、チームは解散となる。

問題はそれだけではなかった。そのイベントで待ち構える皇神<sup>オージン</sup>はこの世界の創造主であり、四人が倒してきた魔獣や邪神などはおろか、彼等に試練を与えてきた幾多の神々すら足元に置く絶対唯一の存在なのである。冒険者の間では皇神と対峙して帰った者は居ないと言われて忌諱されていたし、実際、皇神との邂逅を果たした冒険者を彼等は知らなかった。

グレゴリは戦士、ネッドは盗賊、ホービーは剣士であり、コーティは賢者だった。そう、彼女は生粋の賢者だったのだ。全てに疑問を抱き、真理を探求し、叡智を渴望する、産まれについてのフィロソ

ファイアだった。

翌朝。一向は獣道を分け進んで街道へ入った。コーティとホービーはギルド本部へ向かう為に街道を南下し、グレゴリとネッドは新たな仲間を求め王都へ向けて北上する事に決まった。

「楽しかったぜ今まで。なに、きつとまた会えるさ。志を高く持つていればな」

「二人の事は忘れないよ。また一緒に旅できるのを待ってるからね」  
四人は握手を交わすと、それぞれの方向を目指して歩き出した。  
もう誰も振り返らなかった。

「ずっと気になっていたのよ」

ホービーはコーティにどんな言葉をかけるべきか思案していたが、やがて彼女の方から話が始まった。

「あの透明な壁や、目の前で突如消える人達の事を」

ホービーは返す言葉も無く、ただコーティの話を聞いていた。コーティと共に進むと決めたホービーだったが、実のところ彼にしても真理や世の中の仕組などに興味はなかった。

「何故だか解らないけど……私には時間が無い気がするの。一刻も早く皇神と会わなければ手遅れになる。ずっとそんな気がしてた」

ホービーにはその横顔が寂しそうに見えた。

ギルド本部は街からそう遠くない場所にある為、ほどなく到着した。

受付で件のクエストを希望すると、鍵を渡され、大陸中央に聳え立つ塔へ向かうよう指示された。だがあの塔の主である邪神アスラ

は以前のクエストで彼等が退治した筈だった。

二人が困惑していると、奥からシルクハットと黒の燕尾服で固めた男が現れた。

「アスラが座っていた玉座の奥の壁が隠し扉になっています。鍵穴があるのでその鍵で開けて下さい」

男はにっこりと微笑んだが、彼の笑顔はいつでもホービーの癢に障った。

「アンタがギルドの人間だったのは本当だったんだな」

いつも通り男に悪態をついて見せるホービーだったが、やはり男がそれを意に介す事はなかった。

この優男はホービー達の行く先々で神出鬼没に現れ、一方的にヒントを与える謎の人物で、彼の正体を、否、名前すら知る者はいなかった。ホービーはこの男が嫌いだった。

「行こう、コーティー」

ホービーがコーティーの手を強引に引いて受付を後にした。コーティーが振り返ると、もう男の姿はそこには無かった。

大陸中央の塔は天より高く聳えている。突端は霞みがかって消え、地上からその天辺を知る事はできない。かつて人々の間で頑なに信じられてきた楽園に通じているという噂も、今では多くの冒険者によって否定されていた。

ホービーとコーティーは再び塔へ挑戦し、以前より強くなったモンスターを倒しながら進み、男の指示通りに玉座背面の隠し扉から

更  
に  
上  
へ  
と  
昇  
っ  
た  
。　そ  
こ  
に  
は  
今  
ま  
で  
倒  
し  
た  
リ  
ー  
ダ  
ー  
ク  
ラ  
ス  
の  
幻  
獣  
が  
復  
活  
し  
て  
待  
ち  
構  
え  
て  
お  
り  
、　二  
人  
は  
辛  
く  
も  
撃  
破  
し  
な  
が  
ら  
塔  
を  
昇  
り  
続  
け  
、  
よ  
う  
や  
く  
最  
上  
階  
へ  
と  
辿  
り  
つ  
い  
た  
。

## 故郷へ

そこは一つの世界だった。

光が燦々と降り注ぎ、視界の限りに咲き乱れる鮮やかな花々の甘い香りが、二人の鎧やローブに染み付いた血糊の臭いを掻き消した。世界を縦断する小川には一っただけ橋が架かっており、ホービー達は怪しみ、戸惑いながらそれを進んだ。

やがて野晒しの——だが全く傷みの無い——小さな円卓が現れ、彼のシルクハットの男が豪華な椅子に座って紅茶を飲んでいた。

「ようやく辿りつきましたね。おめでとう。私が皇神<sup>オジン</sup>です。まあお座り下さい」

意味が全く解らないホービーはどういう事だと吼えて椅子を蹴り飛ばした。

「それを説明する為には、一つ約束をしても貰わねばなりません」

「約束？」

二人の声がハーモニーを奏でる。

「ええ。貴方がたが知りたがっているこの世界の真理、そして……」

男が手を軽く打ち鳴らすと、その背後に扉が現れた。周りには壁などは無く中空に扉だけが直立している。

「この扉の向こう側。これがどこへ通じているのか。それらを教える事は可能です。しかし、それを知った者はこの扉の向こう側へ行つて貰います。一度この扉を潜ったなら、二度とはこちらへ戻る事はできません。この条件はこの世界の理なのです。手を離れた林檎が地面へ向かうのと同じように、止められない事なのです。……ホービーさん、貴方は私を倒してでも一方的に話を聞き出そうと思っているかもしれませんが、それは不可能ですのでご忠告しておきます」

凶星を突かれ、ホービーはたじろいだ。どうすべきかコーティに振り返ると、彼女は真直ぐな決意の眼差しをホービーに向けていた。

「オーケー。話してくれ。僕達は元々覚悟の上でここへ来たんだ。戻れない事なんて承知の上さ」

ぶつきらばうに言い捨ててホービーは蹴り飛ばした椅子を戻して腰掛けた。コーティもそれに倣う。

「端的に話せば、これはゲームだったのです」

「ゲーム？」

「そう。世界中を旅しながら仲間と交流するゲームです。本当の貴方達は外の世界——現実世界——でサーバと脳を直接繋いで夢を見ているに過ぎません。そして私はこのゲームの創造主であり管理者クリエイターなのです」  
ゲームマスター

「じゃあアナタも外の世界の住人なのね」

「そういう事です。プレイヤーではありませんけどね。プレイヤーは各地の施設に用意されたサーバに繋がるポッドの中で眠りに着いています。この作られた世界に来る前に現実の記憶を施設へ預け、このゲームを終了するとその記憶を戻されます。あの扉がログアウトの為のゲートです」

男は背後の扉を指差してから、紅茶を含んだ。

「じゃあ突然目の前から人が消えてしまうのは」

「個人的な事情で強制ログアウトされた方々です」

「じゃああの透明な壁は」

「判定です。あの先はテクスチャを貼っているだけで実際には地形データは存在しません。……この先、拡張マップが実装されて行くようになる事はあるかもしれませんがね」

ホービーは落胆し、全てを理解したコーティは満足していた。

二人は取り決め通りにこのゲーム「ネクストゲート」からログアウトしなければならなかった。それはネクストゲートの参加者全てがログインする前に承諾した規約で定められていた。

ホービーは男に土下座してログアウトを一日待って貰い、楽園でコーティとの最後の夜を過ごした。男は翌日また来ますと言い残して扉と共に消えた。

ホービーはそれまでも何度かあったようにコーティと肌を重ね、想いをぶつけ合った。ホービーはまるで明日が無いかのように、ただ必死に動いた。

「絶対に迎えに行くよ。そしてあつちで一緒になろう。いくつ歳が離れていても構わない。ゲームの中だって、僕らは一緒にやってこれたんだ。きつと大丈夫さ。そうだ、このゲームを作った会社に入社して、このゲームのアクセス履歴を見ればいいんだ。そうすればコーティの個人情報が掴める筈さ」

眠る前、いい考えだとばかりにホービーは語ったが、コーティはぼんやりと首を縦に振るばかりだった。

「ホービー。どんないい思い出も——例えそれが現実の思い出としても——後になって振りがえれば、それは全てファンタジーだよ。もう、その頃には戻れないの。例えば、すごく好きな人が居ても、時間が経って再会すればもうそれは別人なの。二人の間の、お互いが知らない時間が、二人を他人にしてしまうのよ……」

横たわったまま身じろぎもせず、かつてホービーだった少年は暗闇を眺めていた。やがて光が射し込み、彫りの深い顔が現れたが、彼はシルクハットでも黒のスーツでもなかった。

少年は天を仰いだまま、社員タグを着けた安いビジネススーツの男に向かって合わない靴の話をしたが、男は何故今そんな話をするのかと訊き、不安そうに「安心して下さい、あなたが今どこにいるか教えます」と諭した。

「わかっています」ホービーは囁き声で言い、泣きながら息を吸い込んだ。

「帰ったんだ！」

そう叫び、気を失った。

## ネクストゲート

少年はそのまま病院に搬送されて検診を受けたが特に異常は無く、苦々しい顔で現れた母親と気まずい挨拶を交わして日常へと戻った。

約二年ぶりの外気はじつとりとして蒸暑く、嫌らしい程に夏である事を主張した。少年は背と脇に汗を滲ませながら身の振り方を思案して、とりあえず通信教育で中学教育を一からやり直す事にした。三歳も違う子供と同じ教室に通うのは少年にとって不可能と言っただけであった。

周りの人間より三年間遅れた少年は、中学教育を終える頃には十八歳になっていた。親との溝は相変らず埋まらず、以前のように引き籠もったりヒステリックになったりする事は無かったが、親に本音をぶつける事も無くなった。

親との協議の結果、少年は夜間高校に通う事と一人暮らしを始める事が決まった。学費と家賃は仕送りがあつたが、高熱食費と雑費を得る為に少年はアルバイトを始めなければならなかった。

少年は現状と自身の将来を考える度に、十代という貴重な時間うちの二年間——彼の世界では約四年間——をゲームに費やした事を次第に後悔するようになっていった。その感情はコーティーに対する裏切りのように感じられ、少年は更なる罪悪感に捕らわれた。

なるべくコーティーとの約束——彼女との再会——を早いうちに果たせるようにゲーム業界関係のアルバイトを探し、どうにか下請け中小メーカーにデバッガーとして潜り込む事ができた。

コンシューマ向け3DRPGのデバッグに参加した少年は、ある日三時間ひたすら壁に向かって体当たりし続け、明くる日は全種類の装備品を付けたり外したりしながらモデルを回転させ、嫌がらせのような内容のチェックシートを日々埋めていった。

夜間学校の出席日数をギリギリで維持しながら、二年間続いたデバッグは発売3週間前によりやく終わった。

当のゲームは対抗馬の少ない時期だった事もあってそこそこ売れ、二ヶ月ほどゲーム週刊誌の攻略ページを賑わせた後、それまでの多くのゲームと同じように中古ソフトの棚やワゴンの中に埋もれていた。

そうしてようやく少年は、ゲームというものが一夏の祭りのようなもので、どんな大作も常に時代を支配し続ける事は出来ないのだと知った。

それでも少年はMMOは、ネクストゲートだけは違うと思っていたが——コーティとの事を別にして——もう一度あの世界へ行きたいかと考えると、全くそう思えなかった。

実際のところネクストゲートはその年も稼働し続けていて、ホービー達が行こうとしても行けなかったあの見えない壁の先にも世界は広がり続けていた。しかし他社でも似たようなゲームが始まった事もあって、ユーザー数を当時から維持できているかは怪しかった。

少年は生き方に困惑したまま他のプロジェクトのデバッグを続け、誕生日を迎えて少年ではなくなった。

高校課程を修了したら場末の大学へ入ろうと決めていた彼だが、

真面目な仕事っぷりを買ったプロジェクトのチーフが推薦してくれるというので、なし崩しに正社員へと昇格した。

彼はここで実績を積みあげた会社に入りやすくなるだろうと目論んでいたが、企画屋という名の雑用係としてあらゆる部署でこき使われ、目の回るような忙しい毎日を送るうちにコーティの事を忘れる事が多くなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3520ba/>

---

おれたちのせかいへ

2012年1月9日21時54分発行